

## 研修名 支援を必要とする子どもの保育

平成30年8月27日(月) 10:00~16:00

講演 「特性のある子どもへの支援スキルの習得」

講師 京都府立医科大学大学院 全 有耳 氏

### 1 講演要旨

#### 1) 発達特性のある子への支援の考え方

・診断基準として次の診断に分けられる。「知的能力障害群(発達が遅くゆっくりな子)」「コミュニケーション障害群(自閉症のような偏りはないが言葉の遅れなどがある)」「自閉症スペクトラム障害(ASDと言われることが多い)」「注意欠如・多動性障害(ADHD)」「限局性学習障害(学習上の問題)」「運動障害群(不器用、姿勢が整わないなど)」「チック障害群」「他の神経発達障害群」である。

・発達の障害とは、発達の特性があること自体は障害ではない。特性と環境の相互作用の結果、配慮や支援が必要であったり、社会生活上の困難さが大きい場合に認定される。元々持っている特性に環境要因が加わると、さらに悪化する。素因発達の特性を持っている子は育てにくさがある。サインが出しにくく表に出さない子どももいるため、「環境要因」が先か、「素因」が先か紐解いていく必要がある。

・早期にアプローチしていく必要があるのは育てにくさへの支援である。養育環境の問題は早目の対処が必要である。

・発達のアセスメントの際に考慮することと支援の目標として、①発達のスピードはどうか ②発達の偏り(発達障害特性)の程度 ③環境要因の影響(人数、子どもの状態など)はどうかを考慮することが大切である。そして、その子に応じた発達課題の達成と自己理解、自己肯定感の育ちを支援する。

#### 2) 行動理論を用いた子どもへの関わりのポイント

・ペアレントトレーニングとは、子どもの「行動」に焦点を当て、その特性を理解すること。より効果的な対処法を学ぶことである。具体的に行動を見て褒めていく。叱られると自己評価が下がる→やる気をなくす→問題行動を起こすというサイクルになる。褒められると自己評価があがる→努力する、目標ができる→適応行動が増えるという良いサイクルになる。良いサイクルになるように、保護者向けに10回シリーズで行われている。

・ティーチャー・トレーニングとは、①子どもの行動の観察とプラスの注目 ②行動の3つのタイプ分け③スペシャルタイム ④行動の機能分析と環境調整 ⑤上手に指示する ⑥上手に無視する(待つからほめる)である。先生と言われる立場の方に向けてのトレーニングも行われている。

・子どもと向き合うときの大切なこととして、肯定的に注目する。注目すること=ほめること。褒められないのはゴールが高すぎるからである。その子の変化に注目し褒める。いきなり高望みはしない。スモールステップで褒めていく。子どもの発達の特性に合わせて環境を調節する。そして、一番大切なのは、一貫性のある対応をすることである。

・上手に褒めるポイントは、①良い行動が見られたらすぐ褒める ②子どもと同じ目線で ③感情をこめて④25%ルールでまず1回途中で褒める。そしてやり終えたらもう1回褒める ⑤何が良かったのかを具体的に褒める ⑥結果だけでなくプロセス(頑張っていたこと)をしっかり褒める。

・上手に指示を出すには、①まずは自分自身が落ち着く ②子どもの注意をひいてから話す ③ま

ず予告をする ④穏やかに近づいて落ち着いた声で話す ⑤指示に従うことができれば褒める。

・無視するとは、見て見ぬふりをして好ましい行動を待つことである。この効果的な無視をする場合は、その子との関係ができているということが大前提である。上手に無視をするには、①好ましくない行動が始まったらすぐに無視をする。 ②無表情、無感情でその行動に興味がないことを示す。

③好ましい行動に変わったらすかさず褒める。この対応は、自閉的なタイプの子どもには難しいのでしっかりアセスメントをした子どもにのみ対応する。

・SST（ソーシャルスキルトレーニング）とは、対人関係を円滑にするための技能である。自閉症タイプの子どもは教えてもらわないと分からないことが多い。学んで身につけていくため、このトレーニングが必要。SSTの流れとして、①「導入（どのような場面で使うか、なぜ必要なかを説明したり、考えさせたりする）」②「モデリング（やってみせる）」③「実行→フィードバック（振り返りの時間をもつ）」④「般化・定着化（日常の場面で時効できることを目指す）」

3) 午後は、グループごとに分かれ、ひとつの事例をもとにグループワークをおこない意見交流をする。

## 2 感想

自分自身のスキルの習得の大切さを感じながら、現在担当しているクラスの子どもたちの顔を思い浮かべながら勉強した。特性に合わせることへの大切さの再確認と、過ぎしにくさを一番感じているのは子どもたちであることを再確認するとともに身になる研修となった。子どもたちへの理解はもちろん、保護者との関係もしっかりつくりながら良いサイクルになるように保護者と協力して保育を進めていける保育者でありたいと感じた。また、どんな場面においても褒める部分を常に見つけられる保育者でありたいと感じている。「スモールステップ」という言葉の通り、少しの変化も見逃さないように、子どもだけでなく、クラスの職員同士でまず褒め合う環境づくりを行い、子どもたちにも反映させていけたらと思う。

(記録 みのり保育園 林 理紗)